

中国語母語話者の日本語学習による ポライトネスの構造と意識の変容 — 依頼に対する断り難さに着目して —¹

黄 郁蕾²

玉岡 賀津雄³

ブラーエヴァ, マリア エドアルドヴナ⁴

要旨: 本研究では, 中国語を母語とする日本語学習者が日本語を学習することで, ポライトネスの構造と意識の変容を, 依頼の断り難さに着目して調査した。ポライトネス理論の枠組み (Brown & Levinson, 1978, 1987) では, ある行為 x の持つフェイス侵害リスク (W_x) の大きさは, 相手との社会的距離 (D), 力関係 (P), x という行為が特定の文化内でもつ負担の度合い (R_x), の3つの要因で, $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$ と示される。本研究でも, この理論的枠組みを使って, これらの要因群の断り難さへの影響を, 回帰木分析を使って分析した。ただし, R_x は, 依頼場面の影響を R_{sit} とし, 言語使用の違いの影響を $R_{l\&c}$ として区別した。分析の結果, 断り難さに対して最も強く影響したのは社会的距離で, 次に力関係と場面の影響が見られた。中国語と日本語の使用言語の違いによるポライトネス意識の変容についても検討したが, 社会的距離と力関係よりも影響力が弱く, 依頼場面によって多様性が見られた。

キーワード: 断り難さ, ポライトネス理論, 社会的距離, 力関係, 言語・文化差

¹ English title: Structure and change of politeness factors and awareness by native Chinese speakers learning Japanese: Focusing on difficulties rejecting a request

² HUANG, Yulei: Graduate student at the Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University, Japan. E-mail: huangyulei1226@gmail.com

³ TAMAOKA, Katsuo: Professor at the Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University, Japan. E-mail: ktamaoka@lang.nagoya-u.ac.jp

⁴ BULAEVA, Maria Eduardovna: Graduate student at the Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University, Japan. E-mail: mashabyaka@gmail.com

1. はじめに

「断り」とは相手の依頼や要求に対して「その意に沿えない」という意図を表明し、相手に理解してもらうための発話行為であり、相手との関係維持と「断り」意図の伝達という両方に配慮が求められる言語行為とも言える(尾崎, 2006)。両立させるためには、話し手は、依頼者との多様な関係を慎重に考慮する必要がある。相手との人間関係を損なうリスクを伴っているため、「断り難い」と感じるのが普通である。その配慮を表現する言語現象はすべての社会的・文化的集団に存在する。その言語現象を、英語では *politeness* と称するが、日本語ではカタカナの「ポライトネス」の表現で定着しつつある。Brown & Levinson(1978, 1987, 以下, B & L とのみ記す)のポライトネス理論によると、人間関係, 社会・心理的距離, 相手にかかる負担の度合いなど, 複雑に絡み合う社会的諸要因が「断り」のフェイス侵害リスクに関与するとしている。また, 同じ行為であっても, 文化や習慣によって, フェイスを侵害するリスクが異なり, それに応じたポライトネス・ストラテジーも多様に存在する。中国と日本は同じアジア文化圏に属しているものの, それぞれ文化的に異なった特徴があり, 断り行為に対する認識も一致しているとは言えない。日本語を学習することは, 同時に日本の社会・文化における様々な認知様式を身に着けるプロセスでもあり, 日本語学習者の断りの難しさにも, それが強く影響するのではなかろうか。

2. 中国人の「断り」の発話行為に関する先行研究

日本と中国での「断り」という発話行為の語用論的特徴に関する先行研究は少なくない。それらの研究は, 質問紙を用いた談話完成テスト(DCT)あるいはロールプレイを用いており, 「断り」の表現を意味公式によって頻度を産出して, 分析するというアプローチを取っている。「断り」の分析方としては, Beebe, Takahashi & Uliss-Weltz (1990)の「意味公式(semantic formulas)」の下位分類がよく使われる。

藤森(1994)は, Beebe et al. (1990)の意味公式の分類を修正し, 意味公式の発現順序, 発現頻度をパーセンテージにより分析し, 日本語学習者に見られる語用論転移について検討した。その結果, 日本語母語話者は親疎の相手, 目上に対し手も{詫び}先行型をとる。中国人日本語学習者は親しい相手に対して{詫び}を使用しない傾向があるものの, 相手が親しくない場合, {詫び}先行型を用いることがあることから, 親近度の高い相手を断る場

面では語用論転移が検証された。一方で、{代案}の提示は日本語母語話者にはあまり見られなかったが、中国人日本語学習者の場合は使用頻度が高いから、母語からの語用論的転移が見られたと示唆した(藤森, 1994)。

また、蒙(2008)は、藤森(1994)と伊藤(2003)の意味公式分類をさらに修正した。中国人日本語学習者による{言いさし}{呼称}を「断り」の意味公式として挙げている。中国語では、こうした{言いさし}{呼称}を多様な場面および相手に対して使用するが、「断り」においても、母語でからの語用論的転移でこれらの表現がよく使用される傾向がみられた。しかし、{言いさし}や{呼称}は、「断り」に限定されて使用される訳ではないので、これを「断り」に個別の意味公式とするには無理がある。さらに、蒙(2009)は、断りの切り出しと終結部に焦点を当て、中国人日本語上級学習者、日本語母語話者、中国人非日本語学習者の場面別断りパターンの使用頻度を比較した結果、親しい相手に対しての断りの切り出しには、日本語学習者の{詫び}先行型、{ためらい・相づち}先行型の使用頻度は、日本語母語話者よりも少なく、中国人非日本語学習者よりも多かった。また逆に、終結部では、ある特定の場面で代案終結型の使用が、日本語母語話者より多く、中国人非日本語学習者よりも少ない頻度であった。

崔(2002)は、日本人は中国人に比べて、{理由}を使用する際に、理由の内容が曖昧であり、中国人の用いる{理由}は具体的で種類が多いという特徴が見出した。中国人は断る場合、呼称の多用が特徴の一つとしてあげられる(崔, 2002; 文, 2004; 蒙, 2008)。

加納・梅(2002)と邱(2000)は断りのポライトネス・ストラテジーに影響する要因として、「上下関係」と「親疎関係」を取り上げ、それらの優先順位について検討している。加納・梅(2002)は談話完成テストを用い、中国人の場合、相手との関係が疎である場合は、目上であるか同輩であるかに関係なく、詫び先行型が多いことを見いだした。また、親しい目上には結論先行型と直接的な断りが見られないことから、中国人が上下関係より親疎関係を重視すると主張した。しかし、この加納・梅(2002)の結果は、親疎関係が上下関係より優先されるとか、どちらが重視されるかという問題ではなく、相手が親しい場合には上下関係で目上の人に配慮するという意味なのではないだろうか。たいていの場合、親しい目上の人というのは、なんらかの利害関係をともなうことが多く、決して無視できない存在になりがちである。したがって、「断り」に対しても最大の配慮をするのではないだろうか。統計学的に言えば、親疎関係と上下関係の交互作用であると言えよう。

一方、日本人の場合は、加納・梅(2002)は、上下および親疎関係に拘わりなく、詫び先

行型が現れやすいと報告している。ただし、疎の関係の場合、目上より同輩のほうに詫び先行型がやや多くことから、目上より同輩のほうに気を配る傾向があると指摘している。また、日本人では、直接的な断りを用いたのが半数ぐらいいることから、日本語母語話者の方が、断る時には、はっきり相手に自分の意向を伝える傾向があり、「上下関係」と「親疎関係」の優先順位が明確でないと述べている。これは、これまでの日本人の丁寧さという一般的な理解とは異なっており、興味深い報告である。

以上述べてきたような先行研究では、談話完成テストを用いた研究が多く、「断り」表現そのものの分析に重点が置かれている。中国人日本語学習者の断りストラテジーに影響すると予想される「上下関係」や「親疎関係」を個別に捉えた研究は見られるものの、普遍性を追求した B & L(1978, 1987)のポライトネス理論が主張するような社会的距離や力関係などの要因が、断り難さにどの程度影響するかについては積極的に扱われておらず、さらにその諸要因を複合的かつ包括的に捉えた研究ではない。はたして特定集団群の文化や社会的な特性を超えた人間に普遍的なポライトネスが存在するのであろうか。そこで本研究では、B & Lのポライトネス理論の枠組みから、基準として日本語母語話者を設定して、中国人日本語学習者に対して中国語と日本語で質問する条件を設けて、(1)依頼を断る場面における断りの難しさ、(2)断り難いと思われる背後に存在している依頼の相手に対する配慮度という2つの側面を構成する諸要因のメカニズム、さらに中国人の日本語学習経験がポライトネスにどう影響するかを検討した。その際、データの分析方法として、決定木分析(decision tree analysis)のなかの回帰木分析(regression tree analysis)という多変量解析を使って、断り難さと配慮度への諸要因の影響を総括的に分析した。

3. Brown & Levinson(1978, 1987)のポライトネス理論

B & L(1978, 1987)のポライトネス理論は、対人コミュニケーションのあり方を決める諸要因を包括的に示したものである。まず、ポライトネス理論を依頼に対する「断り」に適用した場合の影響要因について概観する。B & Lは「フェイス(face)」という主要概念を使って人間の言語行動を説明している。「フェイス」は、「人間の基本的欲求」(want)である。この概念は、「対面的相互作用」(face to face interaction)における礼儀的行為を、互いの「フェイス」(face)を保護しあうためのものであると捉えた Goffman のフェイスの概念に由来する(宇佐美, 2002)。対人関係の調節における「フェイス」は「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」

ス」に分けられる。「ポジティブ・フェイス」は他者に理解されたい, 好かれたい, 賞賛されたい, 他人に近づきたいというプラス方向(外向)への欲求であり, 「ネガティブ・フェイス」は他者に邪魔されたくない, 立ち入られたくないというマイナス方向(内向)に関わる欲求である。

人に何かを依頼するという事は, 相手に時間や労力をかけさせることになる。相手の「邪魔されたくない」という「ネガティブ・フェイス」を脅かすことになる。依頼を断る行為は, 相手の依頼の受け入れを拒否する行為なので, 断る側の領域に踏み込まれる点においては「ネガティブ・フェイス」を侵害されるものではあるが, 同時に, 相手の利益になるようなことをしないことで自分の他人に好かれたいというポジティブ・フェイスをも侵害してしまう。それゆえ, 依頼を断る際には, 対人配慮が必要になる。その対人配慮の程度は相手のフェイスに対して発話内容が持つ侵害の度合いを反映するものである。そのフェイス侵害の大きさによって様々なポライトネス・ストラテジーが使われる。

B & Lは3つの変数でフェイスの侵害度(W_x ; weightiness of the face threatening acts)を見積もり, $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$ という公式を提示した。この公式によると, ある行為 x のフェイス侵害度(W_x)は, ヨコの人間関係における話し手(S)と聞き手(H)との社会的距離(D; distance), タテの人間関係における聞き手が話し手に及ぼす力(P; power), そして x という行為が特定の文化内でもつ負担の度合い(R; rating of imposition)としての R_x の3つの要因で, 「フェイス侵害行為(FTA; face threatening acts)」の重さ(weightiness)が決まり, それに応じてストラテジーが選択されるとしている(滝浦 2005, 林・玉岡・宮岡 & 金 2011)。

B & L(1978, 1987)はDとP以外の W_x に影響するとされるすべての要因をRという抽象的な概念に包括して, Rを説明した。林・玉岡・宮岡 & 金(2011)および Tamaoka, Lim, Miyaoka & Kiyama(2010)は, 日韓の言葉遣いの丁寧度判定に性差の影響を調べ, 性差の影響を示して, Rには性差の要因も含まれることを指摘した。Kiyama, Tamaoka, & Takiura(2012)は, このRをより詳細に説明するために, (1)場面の内容(R_i ; intrinsic factor, the intrinsic content of a situation)と, (2)対話者の態度を指す文脈的要因(R_c ; the preceding attitude that the interlocutor adopts, contextual factor)という2つに分けてポライトネス理論の公式の汎用性を証明した。そこで, 本研究でも, Rをより詳細に定義して, (1)断り場面の内容(R_{sit}), (2)話し手と聞き手の使用する言語と所属する文化($R_{l\&c}$)の2つに分けた。そこで, 本研究は, B & Lのポライトネス理論を基本的な枠組みとして, 依頼者に対する「断り」に対する「断りの難しさ」に影響するとされる要因を, (1)社会的距離(D), (2)力関係(P), (3)場面・依頼の内容(R_{sit}), (4)日本語と中国語の使用言語と日中文化差($R_{l\&c}$)に設定した。

4. 研究方法

4.1 調査時期と調査対象者属性

2012 年 11 月に、依頼に対する断り難さについての質問紙調査を行った。調査対象者は、中国の大学で日本語を専攻する3・4年生と大学院の1・2年の学習者 53 名(男性 13 名, 女性 40 名)を対象とした。基準として日本人大学生 57 名(男性 20 名, 女性 37 名)にも同じ調査を行った。合計は 110 名である。平均年齢は 21 歳 7 ヶ月(標準偏差は 1 歳 3 ヶ月), 日本人被調査者の平均年齢は 19 歳 4 ヶ月(標準偏差は 7 ヶ月)であった。

4.2 「断り」の場面設定と意識調査

本研究では質問紙調査を行った。表1で示したように、断ることを前提とした依頼場面を9つ設定した。すべての依頼場面は日本と中国の社会・文化において起こりうるような自然な場面を選んだ。断り場面を力関係によって、自分より上位, 同等, 下位に分け, 各力関係によって3つの場面, 合計9つの状況を設定した。さらに9つの場面を「親」と「疎」という社会的距離によって細分化した。「疎遠」(表1では「疎」, 以下「疎」とのみ記す)な相手の基準は「普段あまり話すことのない人」とした。設定した場面は学生にとって日常生活で遭遇しうるもので, 想像しやすい場面である。

表1 9つの「断り」場面の設定

#	場面・依頼の内容(R _{sit} : 負担の度合い)	力関係(P)	社会的距離(D)	
1	旅行先で特定の買い物を頼まれた	目上 - 母親	親	疎
2	研究室の引越しの手伝いを頼まれた	目上 - 先生	親	疎
3	アルバイト先で宴会の幹事を頼まれた	目上 - 上司	親	疎
4	講義のノートを貸すことを頼まれた	同等 - 同級生	親	疎
5	アルバイト先で代理出勤を頼まれた	同等 - 同僚	親	疎
6	5千円を貸すことを頼まれた	同等 - 友達	親	疎
7	宿題の手伝いを頼まれた	目下 - 後輩	親	疎
8	バーベキューの買い出しを頼まれた	目下 - 後輩	親	疎
9	教科書を貸すことを頼まれた	目下 - 後輩	親	疎

質問紙はブラエーヴァ・マリア(2012)で使用した質問紙の日本語版を基に作成し、それから中国語に翻訳した。翻訳作業は著者で行ってから、日本語に堪能な中国人2名にチェックを依頼した。そして、中国語としてもっとも自然な表現を採用した。本研究は、語用論研究であるため、1文ずつを厳密に翻訳するよりも、それぞれの文化において等質の表現になるように意識した。場面1の日本語版は中国に旅行する時に買い物を頼まれるという設定であり、中国版では日本旅行の際の買い物を頼まれるとなっている。日本語版の場面3はアルバイト先であるが、中国の学生はアルバイトをすることがあまりない。しかし、全員が実習を経験しているため、中国版では実習先に変更した。全部で9つの場面を設定した。具体的には、表1に示した通りである。

被験者に依頼に対する断り難さを7段階で主観的に判断してもらった。質問紙では、まず断りの場面を説明し、調査対象者に対する指示文と評価尺度を提示した。「最も断り難しい」場合を7とし、「最も断り易い」場合を1とする7段階尺度である。調査対象者には、自分の考えに最も近いと思われる程度を判断して、数字に○をつけるように指示した。次に、断るに当たり、依頼者に対してどの程度配慮するかを聞いた。「最も配慮する」を7、「最も配慮しない」を1として、同様に7段階尺度で答えてもらった。指示文は以下に示す。

相手の依頼を断る時のあなたの意識について聞かせてください。

① 断り難さについて
この場面はどのぐらい断り難かったですか。最も断り難かった場面を7とし、最も断り易かった場面を1とします。数字に○をつけてください。

② 配慮について
あなたは断る時に、どれぐらい相手のことに配慮しましたか。最も配慮する態度で断ったことを7とし、最も配慮しない態度で断ったことを1とします。数字に○をつけてください。

① 断り難さ	とても 断り易い	とても 断り難い
	1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____ 6 _____ 7	
② 配慮度	もっとも 配慮しない	もっとも 配慮する
	1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____ 6 _____ 7	

中国人日本語学習者には、中国語版と日本語版の両質問紙に答えてもらった。母語の影響を避けるために、まず日本語版の質問紙に答えてもらい、1週間後、中国版の同じ質問紙に答えてもらった。下記は質問項目の一例である(場面2, 研究室の引越しの手伝いを頼まれた)。

(3) 親しい間柄の指導教員の授業が終わった後、あなたは指導教員に研究室の引越しの手伝いを頼まれました。

指導教員: ○○さん、今日は時間あるかな? 今日研究室の引越しをするんだけど、手伝ってくれると助かるんですけど。

相手の依頼を断る時のあなたの意識について聞かせてください。

① 断り難さ	とても 断り易い	とても 断り難い
	1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____ 6 _____ 7	
② 配慮度	もともと 配慮しない	もともと 配慮する
	1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____ 6 _____ 7	

(4) 同じ場面で、普段話すことがほとんどないような間柄の教員に研究室の引越しの手伝いを頼まれました。

指導教員: ○○さん、今日は時間あるかな? 今日研究室の引越しをするんだけど、手伝ってくれると助かるんですけど。

① 断り難さ	とても 断り易い	とても 断り難い
	1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____ 6 _____ 7	
② 配慮度	もともと 配慮しない	もともと 配慮する
	1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____ 6 _____ 7	

調査項目は、9つの場面からなる。力関係でこれらの9つの場面が3つに分けられる。社会的距離がそれぞれの場面に2つずつあるので、18項目になる。

5. 分析と結果

図1で示したように、本研究では設定された9つの依頼に対する「断り」の場面について、断り難さと配慮の度合いの両変数を7段階尺度で測定した。また、(1)親と疎の社会的距離、(2)目上・同等・目下の力関係、(3)9つの依頼の内容(R_{sit})、更に(4)日本語と中国語の使用言語と日中文化差($R_{l\&c}$)を、独立変数とした。B & Lのポライトネス理論の公式で言えば、(1)はDであり、(2)はPであり、(3)と(4)は公式の R_x である。そして、予測される変数である断り難さの判断は依頼者へのフェイスの侵害リスク(W_x)への意識である。ポライトネス理論の公式が示す通り、断り難さと配慮度を従属変数(W_x)として、4つの独立変数(PとDはそれぞれ変数が1つ、Rは変数が2つ)で予測する決定木分析を行った。分析には、PASWのVer.18.0(現在は、IBM SPSS)を使用した。

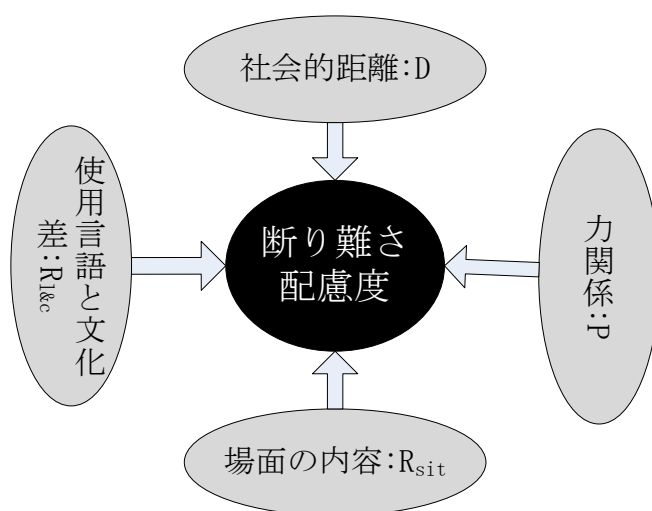


図1 2つの従属変数(断り難さ、配慮度)と4つの独立変数

決定木分析は、複数の要因群から予測に有意な要因を選択し、有意となる諸要因の影響の強さを樹形図の形で視覚的に描いてくれる。木の上部にある要因はより強い影響力を持ち、次のレベルには上の要因と最も交互作用の強い要因が選ばれ、枝を生長させていく。他要因との交互作用がなければ枝は伸びない。決定木分析は各要因が持つ複数の条件のうち、傾向が同様であるものをグループ化できるかどうか、すべての可能性を検討することができる(玉岡, 2006)。そのため、本研究のように断り難さと依頼者への配慮について4つの要因がどう影響しているかを同時に考察したい場合には、最適な多変量解析の手法

である(統計手法については、玉岡, 2006, 2010 を参照)。近年、決定木分析(回帰木と分類木の両方)を使用した社会言語学および語用論の研究が多数報告されている(たとえば、林・玉岡・宮岡, 2005, 2008; Tamaoka, Lim, Miyaoka & Kiyama, 2010; Kiyama 2011; 林・玉岡・宮岡・金, 2011; Kiyama, Tamaoka & Takiura, 2012)。本研究では、予測変数が量的変数なので、決定木分析のなかの回帰木分析を用いた。

5.1 依頼に対する断り難さを予測する回帰木分析の結果

回帰木分析の結果は、図2の樹形図に示した通りである。なお、回帰木分析の全体のサンプル数は、親と疎の2つの設定であり、9つの質問に対して、中国語を母語とする日本語学習者(以下、JFL と記す)の 53 名が、日本語と中国語の両方に対して回答したので、18 問×2 回(日本語と中国語)×53 名=1,908 となった。また、日本語母語話者(以下、JNS と記す)は 57 名が回答し、18 問×57 名=1,026 であった。欠損値は無い。JFL が 1,908、JNS が 1,026 で、全体のサンプル数が 2,934 となった。7段階評価で測定した依頼に対する断り難さの平均は 4.53 で、標準偏差は 1.85 であった。

図2で示したように、断り難さを最も強く予測したのは、親疎関係を示す社会的距離(D)であった[$F(1, 2932)=110.01, p<.001$]。親しい関係(M=4.88)の相手からの依頼の方が、疎な関係(M=4.18)の相手からの依頼より断り難かったことを示している。社会的距離のノードからさらに枝が伸びていることは、親疎で別々な影響関係が見られることを意味している。まず、親しい相手からの依頼を断る場合の難しさについては、場面・依頼の内容が断り難さに強く影響していた[$F(3, 1463)=43.80, p<.001$]。最も断り難かったのは、3つの場面で、それらは場面2(親しい教員に研究室の引越しの手伝いを頼まれる)、場面3(研修先で親しい上に宴会の幹事を頼まれる)、場面6(親しい友達に5千円を貸すことを頼まれる)であった(M=5.36, SD=1.48)。なお、場面2、場面3、場面6が一緒になっているのは、これらの場面が同じ傾向を示しているからであり、回帰木分析では、こうした類似性を数学的に判断してまとめてくれる。逆に、最も断りやすかったのはお母さんから旅行先での買い物を頼まれる場面1であった(M=3.68, SD=2.28)。さらに、いずれの場面でも、JFL の中国語での回答が、JNS の回答より平均が大きいことから、JFL は中国語で断る方が他の回答より難しかったことを示している。なお、JFL の日本語での回答が中国語での回答と統制群の JNS の間に入っており、場面によって中国的であったり日本的であったりする様子が伺える。

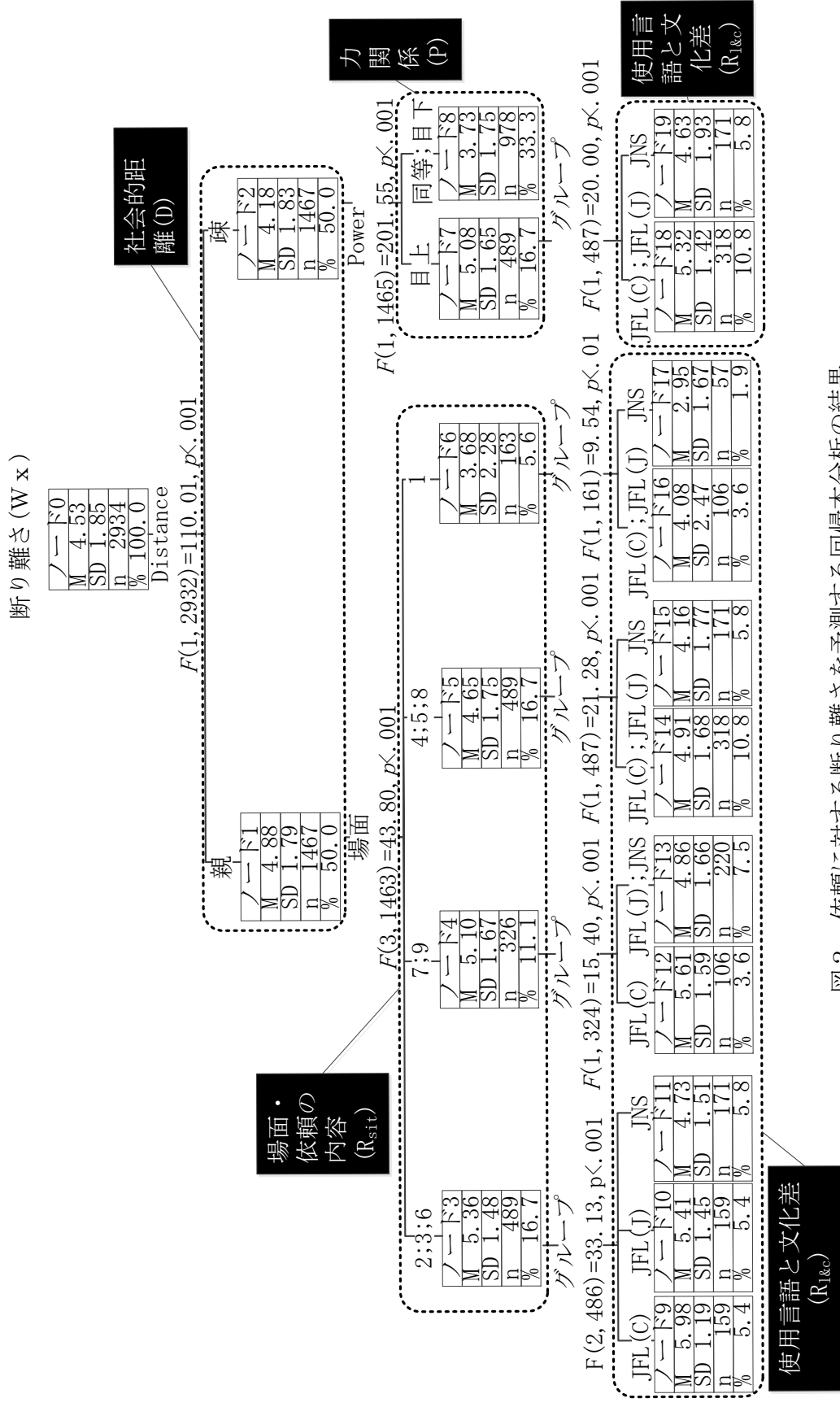


図2 依頼に対する断り難さを予測する回帰木分析の結果
 Mは平均, SDは標準偏差を示す。JFL(C)は中国人日本語学習者の中国語での回答で, JFL(J)は日本語での回答である。

一方、疎な依頼者については、力関係(P)の要因が社会的距離の次に強い要因となっている[$F(1, 1465)=201.55, p<.001$]。目上の依頼者(M=5.08)の方が、同等・目下の依頼者(M=3.73)よりも断り難かったことを示している。目上の相手に対する断り難さの評価が、JFLの回答と JNS の回答で分かれている。目上の相手からの依頼に対して、JFL(M=5.32, SD=1.42)の方が JNS(M=4.63, SD=1.93)より断り難かったことが分かった。同等のデータと目下のデータが同じノードになっているのは、場面の断り難さの評価が同じであることを意味している。なお、同等・目下の相手の依頼を断る場合、樹木が伸びていないことは、使用言語と文化差の要因が有意に影響しなかったことを示している。

5.2 依頼者への「断り」に対する配慮度を予測する回帰木分析の結果

依頼者への「断り」に対する配慮を予測する回帰木分析を行った。図3の樹形図に示した通り、断り難さと同様に、配慮度においても、社会的距離の影響が最も強かった[$F(1,2932)=103.41, p<.001$]。断りについては、その配慮(図3)が断り難さ(図2)と同じように、まず親疎関係で判断されることが分かった。依頼を断る時、親しい相手(M=4.76)に対して、親しくない相手(M=4.09)により気を使ったことが明らかになった。親しい間柄では、場面・依頼の内容が配慮の度合いに強く影響していた[$F(2,1464)=46.93, p<.001$]。最も気を使ったのは、場面2(親しい教員に研究室の引越しの手伝いを頼まれる)、場面3(研修先で親しい上司に宴会の幹事を頼まれる)、場面6(親しい友達に5千円を貸すことを頼まれる)であった(M=5.22, SD=1.64)。逆に、最も気を使わなかったのはお母さんから旅行先での買い物を頼まれる場面1であった(M=3.71, SD=2.18)。親しい関係では場面・依頼の内容の影響が強かったが、場面によっては、グループ・使用言語の影響が次に見られた。具体的には、場面2・3・6[$F(1,487)=22.16, p<.001$]と場面1[$F(1,161)=8.07, p<.05$]であり、JFLの日本語での回答が中国語での回答とは違って、JNSの回答と同じパターンであった。決定木図の「疎」の部分を見ると、親しくない疎な関係の依頼者に対して、力関係(P)の要因が社会的距離の次に強い要因となった[$F(1,1465)=196.08, p<.001$]。断り難さと同様に、親しくない相手に対して、目上の依頼者に対する(M=4.96)方が同等・目下の依頼者(M=3.65)より気を使った。更に目上の依頼者に対して、場面1(友達のお母さんから旅行先の買い物の依頼)、場面2(親しくない教員に研究室の引越しの手伝いの依頼)と3(研修先で親しくない上司に宴会の幹事の依頼)がその配慮度に有意な影響を与えたことが分かった[$F(1,487)=18.61, p<.001$]。親しくない同等の相手と親しくない目下の相手に対して、配慮

の度合いが同じであり, グループ・使用言語の要因がその配慮度に影響しなかった。

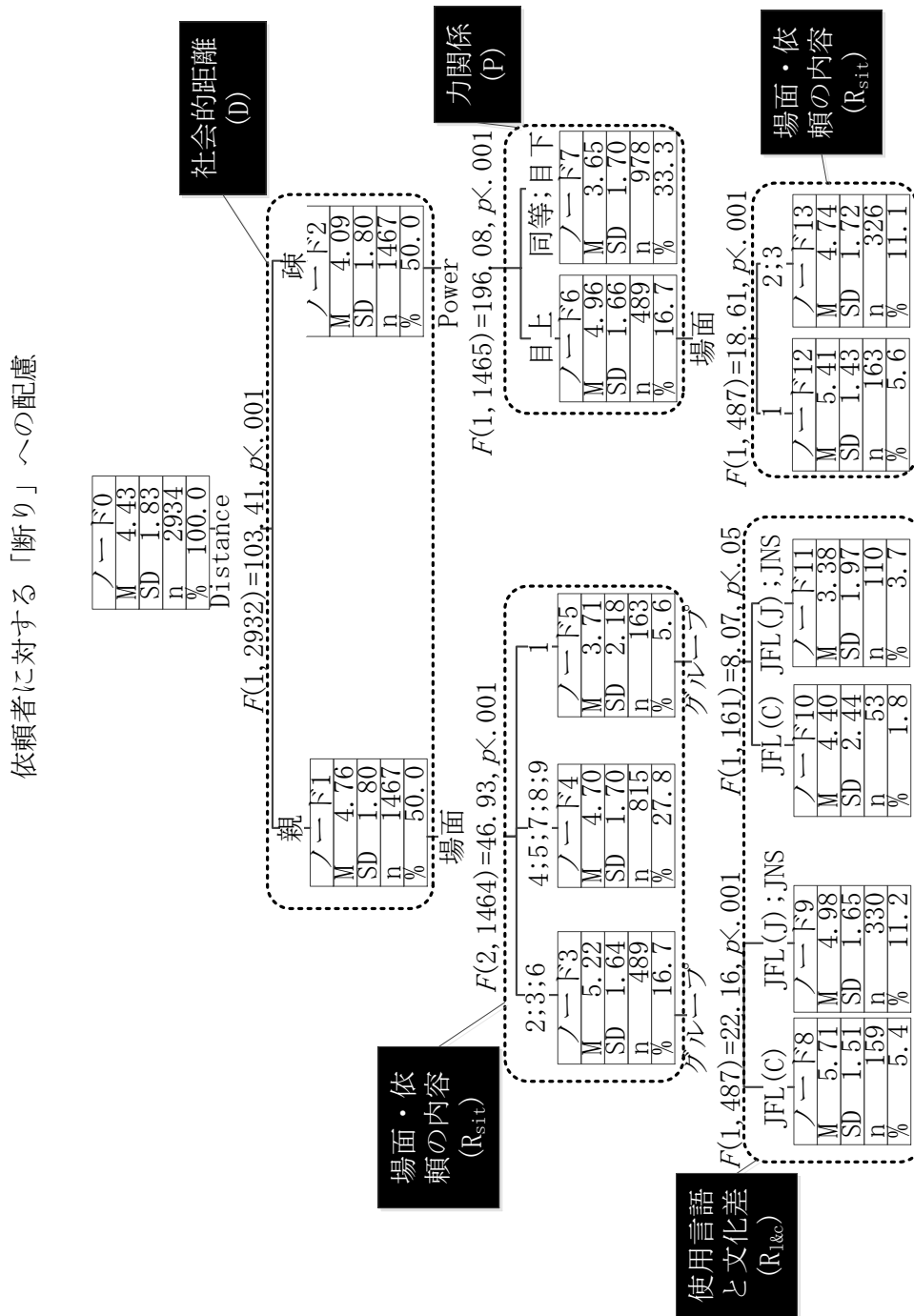


図3 依頼者の「断り」に対する配慮の度合いを予測する回帰木分析の結果
 Mは平均, SDは標準偏差を示す。JFL(C)は中国人日本語学習者の中国語での回
 答で, JFL(J)は日本語での回答である。

6. 考察

B & L(1978, 1987)のポライトネス理論に従い, 力関係(P), 社会的距離(D), 場面・依頼

の内容(R_{sit}), 日本語と中国語の使用言語と日中文化差($R_{l\&c}$)の4つの要因が, 断り難さと配慮の度合い(W_x)にどう影響するかを, 回帰木分析を使って検討した。そして, 依頼に対する断り難さと配慮度において, この構造がどのように影響するかを考察した。また, $R_{l\&c}$ で示した日本語学習による中国人に日本語学習者のポライトネス意識の変容を検討した。本研究の結果は, 以下の構造と変容の2点に要約できる。

6.1 フェイス侵害度を決める要因群の構造

本研究は, B & L(1978, 1987)のポライトネス理論の枠組みを支持し, 中国人日本語学習者および日本語母語話者にも適用できる結果であった。本研究は, さらに B & Lの理論を一步進めて, ポライトネス理論のフェイス侵害度見積もり公式では並列に扱われている諸要因に, 構造的な関係があることを示した。それは, 依頼に対する断り難さと配慮度には, 社会的距離が最も強く影響し, 次いで力関係と場面が影響し, 日本語学習を介したポライトネス意識への影響は比較的弱いという構造であった。

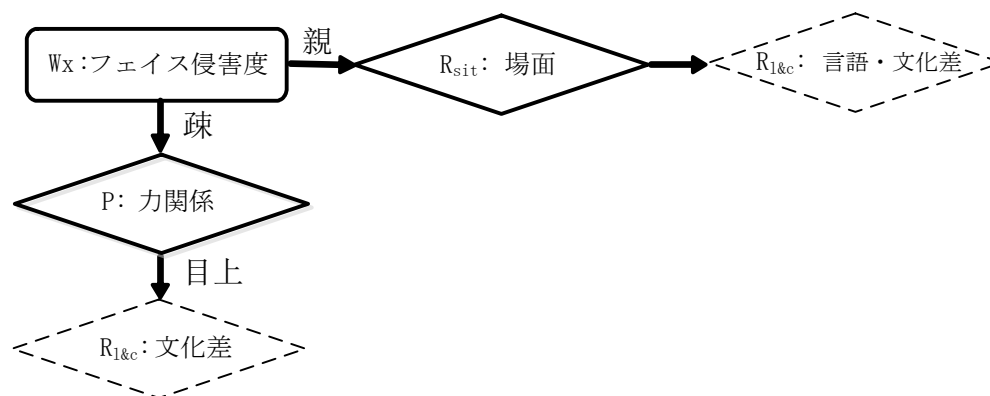


図4 断りにおけるフェイス侵害度を決めるメカニズム

注 実線のダイヤモンド形は影響力の強い要因を示し, 点線のダイヤモンド形は選択的な影響を示す。

具体的に依頼に対する断りにおけるフェイス侵害度を決めるメカニズムを考えると, 図4に示したようになる。まず, 親疎関係の社会的距離で判断される。そこで親疎で2つの流れに分かれ, 親しい場合には, 場面(R_{sit} : 依頼の内容)により, 断りのフェイス侵害度が判断される。次いで, 依頼の内容に応じて, 使用言語・文化的背景によりフェイス侵害度が決まる。一方, 親しくない場合は, まず依頼者との力関係を判断する。相手が目上の場合, 中国人

日本語学習者の日本語使用と中国語使用は同じ傾向を示した。しかし、日本語母語話者の断り難さの判断とは異なっているので、言語差は影響しないと想定される。したがって、図4に示したように文化差のみが影響したと考えられる。以上のように、B & L のモデルが適用できるものの、モデルの枠組みの中で、社会的距離、力関係、依頼場面、使用言語と文化の違いという階層性が見られた。

B & L のポライトネス理論はあくまで欧米の個人主義に基づくものであるという批判もある(Gu, 1990; 井出, 2006; Matsumoto, 1988)。これらの研究では、文化的特殊性を強調し、欧米で生まれた普遍的と言われる理論が東洋文化、例えば日本、韓国、中国のような伝統的な長幼の序を重視する文化には適用できないと指摘している。しかし、ポライトネス理論で取り扱っているポライトネスは1つの「含意」(implicature)であるとし、つまり、状況の中で発せられた言葉によって、ポライトな態度や意図を首尾よく伝えることにより、伝達される可能性を持つある推論なのである。この見方によれば、ポライトネスは社会的関係を構築したり維持したりするために欠くことのできないものだと考えられ、まさしく人間の協調行動一般にとっての前提条件であるということになる。このきわめて抽象的意味において、ポライトネスは普遍的側面を持ち、これらの普遍性は、異なる社会集団に見出されるポライトな話し方に関する様々な文化的思考様式とも矛盾しないのであると述べている(田中・斉藤・津留・鶴田・日野・山下(訳) B & L, 日本語訳の序文, 2011, p.xii)。本研究もポライトネス理論の普遍性を支持するものである。

本研究では、フェイス侵害度の B & L の見積もり公式の要因群が、アジアの中国人や日本人にも適用されることを示した。B & L のモデルの東洋の社会・文化への適応の検討した実証的な先行研究(林・玉岡・宮岡・金, 2011; Kiyama, Tamaoka & Takiura, 2012; Tamaoka, Lim, Miyaoka & Kiyama, 2010) が示したように、本研究でも B & L の公式の普遍性を支持する結果であった。

6.2 日本語学習によるポライトネス意識の変容

親しくない相手の依頼を断る場合、中国人日本語学習者の断り難さの判断は言語の違いに影響されることなく、文化差の影響のみを受けた。また、言語学習によるポライトネス意識には変容は見られなかった。学習者の意識に深く根ざした中国の社会的規範が強く働き、日本の社会・文化的規範からの影響は無かったと考えられる。

一方、親しい間柄で研究室の引っ越しを手伝う場面2、研修先で宴会の幹事を頼まれる

場面3, 5千円を貸す場面6では, 中国人日本語学習者の日本語での断り難さの判断が中国語での判断と日本語母語話者の中間に位置した。日本の社会・文化的規範が影響し, 学習者の断り難さについての判断は日本語母語話者に近づいた。一方, 親しい間柄で宿題を手伝う場面7と教科書を貸す場面9での断り難さの判断については, 中国人日本語学習者の日本語での回答は, 日本語母語話者と同じ傾向を示した。以上のように, 親しい間柄の5つの場面では, 言語学習により目標言語の社会・文化的規範が取り込まれ, 学習の対象言語の断り意識が中国人日本語学習者にも取り込まれていたと考えられる。

7. おわりに

本研究では中国人日本語学習者を対象に, 日中の文化差と言語学習の影響に着目して, 依頼の断り難さを構成する諸要因のメカニズムを, 包括的に検討した。その結果, B & L (1978, 1987) のポライトネス理論のフェイス侵害度見積もり公式の普遍性を支持した。さらに, 本研究では, 公式に示された要因群の影響関係には構造があることを示した。それは, 断り難さに対して最も強く影響するのは, 「社会的距離(D)」であり, 次いで「力関係(P)」および「場面(R_{sit})」であった。その後, 日中における使用言語・文化差の影響がくるが, 場面により多様性が見られた。その際, 中国語での断りの負担度の方が日本語の場合よりも強かった。言語学習は, 断り難さの判断に微妙に影響することが分かった。今後, ポライトネス意識の変容が言語学習の過程で漸進的に起こるかどうか, また個々人の性格特徴や異文化に対する受容度に影響されるものなのかどうか, を検討していきたい。

[参考文献]

- 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店。
- 伊藤恵美子 (2003) 「勧誘行為に対する断り方の選択をめぐって—『マレー・ジレンマ』の検証—」『言語文化学会論集』 21, 75-84.
- 宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論の展開1「ポライトネス」という概念」『月刊言語』 31(1), 100-105; 31(3), 108-113; 31(4), 96-101; 31(5), 100-105. 大修館書店。
- 尾崎喜光 (2006) 「依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現」『言語行動における「配慮」の諸相』(pp. 89-114), くろしお出版。

- 加納陸人・梅暁蓮 (2002) 「日中両国語におけるコミュニケーション・ギャップについての考察—断り表現を中心に」『言語と文化』 3, 19-41.
- 崔平 (2002) 「中国人と日本人の『断り表現』の相違について—依頼される場面をめぐって」『日本語教育と異文化理解』 1, 10-18.
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』大修館書店.
- ブラエーヴァ・マリア・エドアルドヴナ (2012) 『ロシア人日本語学習者の依頼に対する断り—場面の意識の度合いと断り戦略の選択に影響する要因』名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士論文.
- 藤森弘子 (1994) 「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー—『断り』行為の場合」『名古屋学院大学日本語・日本語教育論集』 1, 1-19.
- 文鐘蓮 (2004) 「断り表現における中日両言語の対照研究—意味公式の発現頻度を中心に」『人間文化論叢』 7, 123-133.
- 蒙韞 (2008) 「中国人日本語上級学習者の語用的転移の一考察 - 依頼に対する断り表現のポライトネスの表し方から - 」『国際開発研究フォーラム』 36, 241-254.
- 蒙韞 (2009) 「中国人日本語上級学習者の語用論的特徴の一考察 - 依頼に対する断りパターンから - 」『小出記念日本語教育研究会論文集』 17, 53-71.
- 玉岡賀津雄 (2006) 「決定木分析によるコーパス研究の可能性 - 副詞と共起する接続助詞『から』『ので』『のに』の文中・文末表現を例に - 」『自然言語処理』13(2), 169-179.
- 玉岡賀津雄 (2010) 「コーパス分析の研究例3—語彙的・統語的複合動詞の特徴についての計量的解析」中本敬子・李在鎬・黒田航 (編)『新しい認知言語学研究法入門』(pp. 184-199), ひつじ書房.
- 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生 (2005) 「味覚形容詞『甘い』『辛い』『渋い』『苦い』『塩辛い』『酸っぱい』の基本義と別義に関する新聞および小説のコーパス出現頻度の解析」『日本語研究』 12, 131-142.
- 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生 (2008) 「日本語と韓国語の第三者待遇表現 - 聞き手の違いが他称詞と述語待遇選択に及ぼす影響 - 」『山口県立大学国際文化学部紀要』 14, 56-70.
- 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞 (2011) 「丁寧度判定で測定したポライトネス・ストラテジーの要因に関する決定木分析」『日本文化学報』 47, 101-115.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in refusals. In R. C.

- Scarcella, E. Anderson & S. C. Krashen (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language* (pp. 55-73), New York: Newbury House Publishers.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. N. Goody (Ed.), *Questions and politeness* (pp. 56-289), Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals of Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中典子・斉藤早智子・津留毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子 (訳) (2011) 『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象』研究社)
- Gu, Y. (1990). Politeness phenomena in modern Chinese. *Journal of Pragmatics*, 14, 237-257.
- Kiyama, S., Tamaoka, K., & Takiura, M. (2012). Applicability of Brown and Levinson's politeness theory to a non-western culture: Evidence from Japanese facework behaviors. *SAGE Open*, 1-15.
- Kiyama, S. (2011). Facework in conflict situations: A multivariate analysis focusing on native speakers of Japanese. *PhD dissertation, Reitaku University*.
- Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics*, 12, 403-426.
- Tamaoka, K., Lim, H., Miyaoka, Y., & Kiyama, S. (2010). Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans. *Journal of Asian Pacific Communication*, 20, 23-45.

黄郁蕾 (HUANG, Yulei)

名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士課程後期2年

huangyulei1226@gmail.com

玉岡賀津雄(TAMAOKA, Katsuo)

名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授

ktamaoka@lang.nagoya-u.ac.jp

ブラーエヴァ, マリア エドアルドヴナ (BULAEVA, Maria Eduardovna)

名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士課程後期3年

mashabyaka@gmail.com

Structure and change of politeness factors and awareness by native Chinese speakers learning Japanese: Focusing on difficulties rejecting a request

HUANG, Yulei

TAMAOKA, Katsuo

BULAEVA, Maria Eduardovna

According to Brown and Levinson's (1978, 1987) politeness theory, the weightiness of a face threatening act (W_x) is calculated as $W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$. Within this framework, the present study intended to clarify not only the structure and change of politeness factors but also its awareness by Chinese university students using multiple conditions of rejecting a request in L1 Chinese and L2 Japanese. As a baseline for comparison, the study also investigated native Japanese speakers. Notably, four factors were assumed to influence the degree of difficulty rejecting a request: social distance (D), power relations (P), context of the request situation (R_{sit}), and language and cultural differences ($R_{l\&c}$). A regression tree analysis revealed the strength of influence for multiple factors, indicating that the strongest factor was social distance (D), followed by power relations (P), and then context of the situation (R_{sit}). Although the language and culture factor ($R_{l\&c}$) significantly interacted with other factors, its effect was weaker and more varied as a result of the situational factor (R_{sit}).

Keywords: social distance, power relations, language/cultural differences, difficulties rejecting a request, regression tree analysis

